

墨染桜

季は	地は	後	前
三月	山城	ワキ シテ 花の精	シテ 上野峰雄 里人

「色香もさぞな深草の。 く。 野辺の桜を尋ねん。

詞

「是は旧院に仕へ申し、峯雄がなれる果にて候。誠や良峯も御別れを悲しみ。比叡山に遁世と聞き。一人に限らぬ思ひの色。深草山に分け入りて。古院の常に収覽有りし。花をもせめて詠めばやと思ひ候。

道行

「都出づれば日も既に。竹田の里は是やらん。一夜伏見の夢にだに。 く。 思ひ絶えにし別路の。末

ワキ詞

こそ知らね深草の。花は昔や慕ふらん。 く。

「急ぎ候ふ程に。深草に着きて候。我此陵に来て見れば。人跡絶えたる木のもとは。猶深草の花の色。誰と咎むる氣色もなし。何となく思ひ連ねて候。

深草の野辺の桜し心あらば。此春ばかり墨染に咲け。此歌を短冊に写し。枝につけて帰らばやと思ひ候。

シテ詞

「なふくあれなる御僧に申すべき事の候。

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

シテ「今の詠歌の有難さに。是まで顕はれ参りたり。

ワキ「不思議やな花を詠むる友かと見ればさはなくて。

今の詠歌の有難きとは。如何なる人にてましますぞ。

シテ「此花なくはいかにして。かゝる詠歌のましますべき。唯今手向の言の葉にも。深草の野辺の桜し心あらば。此春ばかり墨染に。

地「咲けども今は恨めしや。く。浮世の春のあだ桜。

風吹かぬ間も有るべきか。あぢきなの習ひやな。

我も浮世を捨衣。君が為めなる焼物の。沈香ながら切髪の。ながらへはてぬ世の中に。様かへて給び給へ。我さまかへてたび給へ。

「さて何故の御発心にて候ふぞ。

シテ「是は御詠歌故候ふよ。

ワキ「そもそも詠歌故とは候。

ワキ「そもそも詠歌故とは候。

シテ

シテ

シテ

「唯今の御詠歌に。此春ばかりと遊ばしたる。此春ばかりを引きのけて。此春よりはと詠じ給はゞ。猶行末も久方の。尽きぬ逢瀬の言葉を添えて。

地「花は是まで青柳の。暇申してさらばとて。立つかと見れば薄霞。木の間の月の影闇く。花曇りして失せにけり。／＼。(中入)

ワキ詞「さては此花の精顯はれて。我に詞をかはしけるぞや。いざや成道なすべしと。

歌「説くや御法の言の葉は。／＼。深草野辺の草衣。

片敷く袖もうば玉の。墨の衣の旅寝かな。／＼。

後ジテ一聲

「あら有難の御経やな。／＼。

クリ

「草木国土悉皆成仏。

地「實に頼もしや此文は。中陰経の妙文。

シテ

「尊とや我こそ草木国土に。色香を見せて花の名の。

地「深草野辺の墨染桜。是見給へや御僧よ。

シテサシ

「それ桜は諸木にすぐれ。水を生ずる徳あり。

地 「是に依つて火難の恐れを為す事なし。されば帝都を花洛と号し。陽花殿月花門。左近の桜に至るまで。禁中に移し置かれたり。

シテ 「主上此木に向はせ給ふ。

地 「是によつて玉簾に。木向といふ紋を顯はすなり。

クセ 「かほどめでたき花の徳。誰かは仰がざるべき。中にも此桜は。旧院の御愛木。花の新に開けし日は。初陽潤ふ御顔も。歎ばせおはしまし。鳥の老いて

帰る時。薄暮くもれる御氣色。無常の嵐吹き來り。花より先に散り給ふ。心なき草木も。歎きの色に出でざらん。此春ばかり墨染に。咲けとの詠は恥かしや。

シテ 「皆人は。花の衣になりぬなり。

地 「苔の袂やせめてなど。かわかざらめや雨と降り。嵐にだにも誘はれて。日数をめぐるあだ桜。うき世の春を隠家と。墨染衣衣更着の。仏の縁を受

けつぎて。草木も成仏の。御法ぞ嬉しかりける。

深草の。(舞)

シテ「深草の野辺の桜し心あらば。

地

「此春よりは墨染に咲け。墨染に咲け。」

シテ「花の袂も風吹かぬほどぞ。

地

「雨にも誘はれ。

シテ「露にもしをれ。

地

「契り少なき花衣。墨染桜こすゑに残る。霞も雲

も明けゆく空に。」松風ばかりや音すらん。